

# 活躍する同窓生

## 夢のつづき「マスターズ甲子園」

平成二十九年六月、原町高校野球部OBチームが「マスターズ甲子園福島県予選大会」に初参加されました。県内には、マスターズのチームが二十三年あり、元高校球児が全国大会への出場券をかけた各球場で熱戦を繰り広げました。



「マスターズ甲子園福島県予選大会」に初出場し、見事、初勝利を収めた原町高校野球部OBのみなさん

「マスターズチーム」を結成するに至った経緯を教えてください。

マスターズ甲子園は二〇〇四年に第一回大会が開催されました。予てから原高野球部OBより「チーム結成、大会出場」との声が上がっていました。昨年、双葉高校野球部OBがチームを結成、マスターズ甲子園の予選会に出場したことがテレビ等で大きく報じられると、そのニュースに触発され、一気に話が進みました。原高野球部OB会に「チームの結成」を提案し、承認を得ることができました。チーム結成の裏には、卒業後も原高野球部OB交流の場となり、世代を超えて野球を楽しむことができたという思いもありました。

原高OBチームは、普段、どれくらいの頻度で練習していますか。

普段は定期的な練習は行っていません。メンバーの大半は、地元のクラブチームに所属しています。普段はそこで練習し、野球を楽しんでいます。



チームへの参加条件はありますか。また、どのようにメンバーを集めましたか。

チームへの参加条件は、一日でも原高野球部に在籍していれば参加可能です。多くのメンバーを集めるために、各年代に連絡担当者を決め、メンバーを募りました。また、現在もメンバーは大募集中です。この会報を見たOBのみなさん、ぜひとも連絡をお待ちしています。

原高OBチームの現在のメンバー数と、どのようなお仕事に就いているのかを教えてください。

現在、メンバーは五十六名います。サラリーマン、地元市の役所職員、会社経営者、教員など様々な職に就いています。

今大会の成績を教えてください。

- 一回戦 対福島高校OB 13対4 勝利 (牡丹台球場)
- 二回戦 対日大東北高校OB 13対15 敗戦 (牡丹台球場)

二回戦の日大東北OB戦は、最終回まで13対5で原高OBチームが大量リードしていましたが、初出場で初勝利を収めた上、今年度、そして前年度の優勝校である日大東北OBチームを苦しめたこと、来年度以降につながる自信となりました。



「マスターズ甲子園」で適用されるルールを教えてください。

大会予選に参加するには、規定されたチーム登録人数の下限を満たす必要があります。「34歳以下14名以上、35歳以上15名以上、計29名以上(上限50人)」です。試合は七回戦ですが、90分が経過した場合は次の打者に移りません。(90分打ち切りです) 試合は、三回までを34歳以下のメンバーで行い、四回以降は35歳以上で行います。試合球はもちろん硬式試合球です。福島県予選大会に優勝したチームが甲子園本大会に出場できます。

さか「原高のグラウンドで、もう一度練習ができるなんて。」

その「まさか」がマスターズ。(50代) 打ち損じ。何十年ぶりに味わう手のしびれ。これぞ硬式野球。(40代)



先輩には先輩がいるものだ。スタンドからの応援。お母さんの声が子供達の声に変わった。(30代) 何も変わっていない。投げ方、打ち方、走り方、ユニホームの着こなし。(20代)

「HARAKO」の字体が年代で微妙に違う。(20代) 親子でベンチ入り。(20代) お父さんの部屋に「HARAKO」のユニホームがあった。(10代女性)

大会に参加しての感想をお願いします。

三回までは34歳以下のメンバーで試合を行うので、どのチームも攻守走かなりレベルの高いプレーが見られます。四回以降は35歳以上の選手たち。ちょっと雰囲気が変わります。「打高、投低、走最低」。バッティング技術は年齢を重ねてもそれなりに維持できますが、肩の衰え、そして何より足の衰えは隠し切れず、一塁ベースが遠のきます。それでも硬式球の乾いた金属音は球児の本能を呼び起こします。自軍ベンチからのヤジに発奮し、皆笑顔でプレーしていました。

「まさか」この歳で、もう一度「HARAKO」のユニホームを着るなんて、「また夢」でした。しかし、試

合に勝ちたい」「上手になりたい」と日々練習に励んだ記憶があります。時にはもがき苦しむ、挫折や絶望も味わいました。また、部活動と勉強の両立も大変な課題でした。人の「やさしさ」や「あたたかさ」はこの困難なときに初めて肌身に感じました。支え励ましてくれた先生、仲間、友人そして家族にただただ感謝です。今思うと、野球をしながら「心の修行」もしていたのだと気づかされます。

甲子園の夢は、高校三年間で終わりますが、マスターズ甲子園の夢は、一生追い続けられる夢です。夢が目標であり、結果になるよう頑張りたいと思います。

皆さんも夢と希望をもって自分の信じる道を、失敗を恐れず果敢にチャレンジしてください。皆さんの人生が輝かしく、素晴らしいものになることを祈ります。(箱崎俊一さん)

「HARAKO」のユニホームが、現役時代を彷彿とさせるプレーを見せた何名かの若いOBがいた。彼らは六十四回卒、二〇一一年度卒業生。彼らほど近年感慨深く「HARAKO」ユニホームを再び身に着けたOBはいないかもしれない。

二〇一〇年、彼らが二年生の秋、原高野球部は川村智監督(四十五回卒)の下、惜しくも東北大会出場を逃したものの、県大会ベスト4、二度目の二十一世紀杯推薦校、選抜は逃したが甲子園への夢が大きく膨らんだ。しかし、二〇一一年三月十一日、東日本大震災、原発事故による避難。彼らの生活が一変した。仲

間は離れ、避難先での生活。先が見えない状況で「野球」などと口にできず、何とも言えぬ悲しさと不安でいっぱいだった。三月十六日、新潟から一本のメールが部員全員に届く。「甲子園」諦めてるやついる? またみんなで野球したい。」

当時の主将、福島雄飛君から部員全員への安否確認を含めたメール。それぞれの避難先でメールを受け取った部員たちは、学校再開、部活再開を信じ、「甲子園」だけを夢見て五月、学校再開の知らせが届く。野球部員は相馬高校サテライトで仲間と再会、野球部復活を喜んだ。また野球ができる。でも、原高グラウンドには戻れない。放課後、部屋となった遠征バスで着替え、そのままバスで借用グラウンドを転々とする日々。夏、七月十五日(金)。船

引高戦。この日初めて福島西高校サテライト、相馬高校サテライトに通う全生徒、三三六名(震災前七〇八名)があずま球場に集まった。平日の試合、一般生徒の応援は異例。ましてや、初の全校応援。この日「HARAKO」

「HARAKO」が戻る。「甲子園の夢再び」、「OBの受け皿」、原町高校OBチームは二〇一七年、誕生した。その記念すべき年に彼らを迎えることが出来たのは大きな喜びだ。また、来年度以降、一年生部員ゼロ、合同チームしか選択肢のない中で、「HARAKO」を選んでくれた、当時二年生五名(六十五回卒)の入会も待ち遠しい。(佐藤一彦さん)

「平昌五輪では原高出身アスリートとして最高のパフォーマンスを発揮してもらいために全力を尽くします。原高生の皆さん、応援をよろしくお願いします!!」

# 同窓生、平昌へ!



原高出身のアスリートとして活躍する平昌選手、佐藤一彦さん

横浜市在住で、柔道整復師、運動器リハビリテーションセラピストをされている門馬崇文さん(四十五回卒)が、平昌オリンピック選手団にトレーナーとして選出されました。バンクーバー、ソチに続く三度目のスピードスケートチーム帯同となりま

「平昌五輪では原高出身アスリートとして最高のパフォーマンスを発揮してもらいために全力を尽くします。原高生の皆さん、応援をよろしくお願いします!!」

す。門馬さんからメッセージを頂きましたので、ご紹介します。なお、次号以降で、門馬さんの活躍を紹介する予定です。楽しみにお待ち下さい。